

「季語のルーツ」

寺田寅彦は、昭和七年（一九三二）八月刊、『俳句講座』（改造社）第七巻所収の「天文と俳句」の中で「季節の感じは俳句の生命であり第一要素である。此れを除き去したものは最早俳句ではなくて、それは川柳であるか一種のエピグラムに過ぎない。俳句の内容としての具体的な世界像の構成に要する 時 の要素を決定するものが、此の季題に含まれた時期の指定である」と述べている。

寅彦は「俳句の生命であり第一要素である」ところの「季節の感じ」を表す言葉を「季題」と呼んでいるのである。今日、私たちが一般的に言うところの「季語」である。一方、今日でも「季題」なる言葉も、なお用いられている。他方、「季感」なる言葉もある。

「季題」「季語」「季感」のかかわりは、大いに気になるところである。

昭和九年（一九三四）に大須賀乙字著『俳句作法』（東炎発行所）が出版されている。乙字は、大正九年（一九二〇）に三十八歳で没しているので、没後の出版である。大正六年（一九一七）『文章講習録』に発表されたものという。没後の出版ということで、乙字の門弟であった志田素琴と大森桐明が詳しい注を施している。その桐明担当の注の一つに、桐明は、

「季語」といふ語は乙字先生の新造語で、その論文に於ける出初めは明治四十一年頃であるが、始めの間は「季題」といふ語と同じく用ひ、従つて「季語感」と「季題感」と特に区別は無かつたやうである。両語が確然と区別して用ひられたのは大正六年の中頃からのやうで、恐らくこゝに明記してある如く本作法の此の箇所執筆の頃からであらう。

と記している。「季語」は、乙字によつて特定概念（意味内容）を付与して用いられた言葉だったといつのである。そこで、『俳句作法』の中の桐明注に該当する乙字の見解を左に掲げてみることにする。

今日まで俳句と名づけられて来た短詩形の妙味が主として如何なる点にあるかと言へば、自然現象の中に作者の感慨がつかはれる点にある。而して其自然現象に就いては俳句では季題といふ言葉を古く使つて来て居るから、其言葉を踏襲して行くと其句の

上の働きからは全く違つた働きをする人事の季題もある。今改めて季題の意義を制限すると同時に、季題といふ語も更めて季語と言はう。季題といへば題といふ語が題詠といふことに紛れ易く、題を課して俳句を作ることの意味にとられては困るのである。其故に以後は僕は季語といふ言葉を使ふことにする。

右の見解で重要な点は、まずは「句の上の働きからは全く違つた働きをする人事の季題」を「季題」から除外しようとの主張である。そのことについては、大正二年（一九一三）十月に発表した「季題の意義を論ず」（『乙字俳論集』乙字遺稿刊行会、大正十年十一月刊、所収）の中で、

季題は自然に存するが故に季題である。其故に人事は季題たる能はずといふが僕の持論である。

と、より明確に記している。もう一つは「季題」には「題を課して俳句を作ること」であるとのイメージが纏綿するので、それを払拭したいとの主張である。そして、この二つの主張を二つながら活かし得る言葉として創唱したのが曖昧な「季題」にとつてかわつての「季語」であつたというわけである。また、大正八年（一九一九）一月に発表した「季題象徴論」（『乙字俳論集』所収）においては、

一 俳句の統一的情趣のうちに作者の情意的活動が融け込んで自我を没した場合に季感といふものが成り立つのであつて、季語とは斯様の場合の中心的景物を指していふのであるから、俳句を離れては季語はないのである。

とも述べている。そして、
一 俳句の統一的情趣を作る上に最も重要な気象なり景物なりが其俳句の中の季語であつて、其他の語は所謂季題であつても何でも其句にあつては季語ではない。

と付け加えている。

先の寅彦が用いていた「季題」なる言葉と、右で乙字が用いている「季題」なる言葉とでは、微妙なずれがあることが確認し得るのである。乙字が創唱した「季語」なる言葉にしても、私たちが、今日「季語」なる言葉からイメージするところの概念とは懸隔があるように思わ

れる（乙字は、「俳句を離れては季語はない」と述べているが、私たちは、広く季節を表す言葉を「季語」と呼ぶ、といったことなど、その顕著な現われである）。それゆえ、右に見てきたのは、あくまでも乙字における、との限定付きではあるが、私たちが普段気になるところの「季題」「季語」「季感」のかかわりが、一応明らかになったと思われる。

そのかかわりを乙字の門弟大森桐明は、わかりやすく敷衍しているので、それを見ておくことにしたい。昭和四年（一九二九）十一月刊の『俳句講座補遺』（俳句講座刊行会）中の「明治大正俳論史」の中で左のごとくに記している。

季語といふも季題といふも実は同一の意味の言葉である。子規以前には、「四季の詞」といひ、子規は、「四季の題目」といふ語を用ゐ、子規以後「季題」となり、乙字先生に至りて「季語」と言はれたのである。併し乍ら、俳句が季感を中心生命とするものであるといふこと、即ち季語の意義といふものは、乙字先生によつて始めて、闡明せられたのであつて、その十全なる研究は先生以前にはなかつたものである。（中略）従来用ゐられた所謂季題といふ語は、それが一俳句の中にあつて光被するときに、それは季語といふことばで謂はなければならぬ。

「題詠と季題」

先の乙字の所論の中で、もう一つ注目しておきたいことがある。「季題」なる言葉の持っているイメージが「題を課して俳句を作ること」のように思われることに対して、乙字が困惑を示していた点である。が、そのルーツを辿っていくならば、当然「題詠」へと逢着するのである。そのことは、なにも江戸時代まで遡らなくても、明治時代の俳句論の中にも窺うことができるのである。明治三十年（一八九七）三月発行の秋声会の俳句雑誌「秋の声」第五号（裳華房）の中で石鷲子なる俳人が随想的俳句論「俳諧さゝ鳴」の中で左のように述べている。

題詠は遂に題詠をはなるゝの修行たるべし。題詠は面小手つけて撃剣するが如し、撃剣の要は真剣の場であり、題詠の要は実詠の時にあり

題詠はなすべく為すべからず、その間に種々の情趣を網羅して、古今東西の雅興をして同一ならしむ

るものは題詠なり、元より実詠にあらずと雖も之を心得つゝ為さば益あり、今の俳人題詠に入て題詠を脱する能はざるが故に、遂に真正の句をよむこと能はず、題詠悪きにあらず、題詠と実詠を区別せざるの悪きなり

石鶯子は、秋声会の新派の俳人である。が、それにもかかわらず「題詠」の有効性を認めているのである。乙字が「季題」のイメージとして「題を課して俳句を作ること」を指摘、困惑していたが、「季題」のルーツを辿るならば、当然浮び上ってくる事項だったのである。

今、試みに旧派の俳句雑誌、明治二十六年（一八九三）の「観風草紙」（京都俳諧道場刊）の何冊かを繙くならば、月並の「題」として「四季随意」とともに、「霞」「柳」「雲雀」等の「兼題」（前もって提示される季題）が提出されているのである。その流れの中での石鶯子の「題詠」論であろう。「実詠」（事に感じ物に触て詩思動くや忽ち句となる）ような作句方法（を屈指しつつも、一つの俳句修行としての「題詠」の認知である。

ここで、「季語」のルーツを俳句の源流である俳諧まで遡って江戸時代の歳時記のいくつかを繙いてみよう。芭蕉以前の歳時記である。

江戸時代最初の歳時記（季寄）は、寛永十三年（一六三六）の奥書のある立圃の俳諧作法書『はなひ草』である。巻末に「四季之詞」として、「四季之詞」が月別に収録されている。もつとはやくには、寛永十年（一六三三）刊、重頼編の俳諧撰集『犬子集』が、春夏秋冬それぞれ句の巻頭に「題目縁」として「四季之詞」をまとめて掲出している。これによって、「四季之詞」が「題」とも呼ばれていたことがわかるのである（和歌における「題」を踏襲したものである）。

近・現代俳句の原点ともいえる芭蕉俳諧においては、「季の言葉」「季ことば」などが用いられ、時に「題」とも言われていた。

「豎題と横題」

その「題」なる言葉のバリエーションであるが、元禄十五年（一七〇二）刊、李由・許六編著の俳論書『宇陀法師』の中に、

題に豎横の差別有べし。近年、大根引のたぐひを菊・紅葉一列に書きならべ出する、覺束なき事也。

との一節が見える。「題」(季題)を「豎題」と「横題」に分ける考え方である。右の一節で言うならば、「菊」や「紅葉」が「豎題」であり、「大根引」が「横題」である。別の資料によってもう少し詳しく見てみることにする。許六の門弟孟遠の著した俳論書『秘蘊集』がそれである。成立は定かでない。その中に「豎題・横題之事」の項があり、左のごとくに記されている。

題に豎横といふことあり。先づ月・雪・花・時鳥・鴈・鶯・鹿・紅葉の類、みなみな豎題なり。是れ本歌の題なればなり。歌、連歌にせぬ題は、みな俳諧の題なり。踊・角力・ゑびす講の類、是をば横といふなり。近年、世上みだりに題ならぬものを句作り、芭蕉流の発句とていたす人あり。是れ以ての外的事なり。惣じて題は翁の時、荒増極りあり。

これによって「豎題」「横題」の区別が明らかとなるのである。和歌以来の「題」が「豎題」であり、俳諧になって用いられるようになった「題」が「横題」だといふのである。もっとも「横題」がどんどん増加される傾向にあったのであろう。歯止めとして、「横題」も、芭蕉時代に概ね定まったと記している。

「豎題」「横題」の中で、「横題」のほうは、江戸時代の庶民生活の色相を濃厚に湛えた「季の言葉」であるが、「豎題」のほうは、日本人の美意識のエッセンスともいふべき美的イメージが纏綿している。それを「本意」と呼んでいる・江戸時代の俳人たちの必読書であった紹巴の連歌論書『至宝抄』は、「豎題」の「本意」に触れていて注目されるのであるが、例えば『秘蘊集』が「豎題」の「つ」にあげている「時鳥」については、

時鳥は、かしましき程鳴き候へども、希にきく、珍しく鳴、待かぬるやうに詠みならはし候。

と記しているといった具合である。「豎題」それぞれの「本意」については、復本一郎著『芭蕉歳時記 豎題季語はかく味わうべし』講談社選書メチエ、を参照されたい。この「時鳥」の「本意」を理解して、はじめて杉田久女の「銚して山ほととぎすほしいまゝ」の面白さがわかるのである。

正保二年(一六四五)刊、重頼編の俳諧作法書『毛吹草』は、「四季之詞」を「俳諧四季之詞」と「連歌四季之詞」に分けて月別に「四季之詞」を掲出しているが、

「俳諧四季之詞」が「横題」に、「連歌四季之詞」が「豎題」に該当する。拙稿が本誌『俳句』の五月号に掲載されるというところで、「俳諧四季之詞」の「五月」の項に注目してみると、「桑の実」「杏子」「楊梅」「枇杷」「紅粉の花」「蜘蛛」「蛭」等、今日でも馴染みの「四季之詞」(季語)が掲出されているのである。これらは、和歌や連歌においては見向きもされなかった、江戸時代の俳人たちが庶民生活の哀歓の中に見出だした「横題」としての「四季之詞」なのである。

〔季語の拡充：「新題」〕

芭蕉の孫弟子、許六門の孟遠は、「題」が無闇に増加していくことに否定的な見解を示していたが、一方、時代の推移とともに、時代を反映しての「題」(季語)は、当然、増加すべきであり、それによって俳句の「新しみ」も保証されるとの考えもある。そんな考えのもと、今日でも「季語」は、確実に増加しつつある。はやくに「新題」に関心を示した俳人に秋声会の森無黄がいる。

明治二十九年(一八九六)十二月発行の「秋の声」第二号(萬巻堂)に寄稿した「今日の俳諧」なる評論の中で左のごとく述べているのである。

月並調を離れて真の俳諧を起さんと欲せば、意匠の巧を求むべきことなり。然れども題寄せ季寄の古臭き書に拠て、徒らに今にありもせぬ古き儀式古き道具などを題詠にする間は、とても古人の言尽したる後に於て、其より旨きことの考付くべき筈なし。

之を避くるにはアイスクリーム、焼芋、招魂祭、耶蘇祭など近世の物事を季寄の中に編入して、其の範圍を拡張せざるべからず。秋声会にて曾て「陸軍始」てふ新題を出したることありしが、一度限りにて廃され、以後復た新題の出たることを聞かず、連句や雑の題に新事物を詠み込む人往々ありても、人の之を喝采する者少きゆゑ、自然之を詠む者なし。歎くべきことと謂ふべし。秋声会にして、月並調に陥らんと心掛る者ならば格別、最早の目的の如く明治の俳諧を振興せんと欲するものならば、文明の新事物を題にして意匠新らしき句を詠み出で、天下をして之に傾かしむるの意気なるべからず。

子規と同時代の「日本派」以外の俳人無黄が「月並調」批判をしている点も興味深いが、それはともかく、

ここでは無黄の「新題」（新季題との意味であろう）への関心に注目したい。「文明の新事物を題にして意匠新らしき句」を詠むことよって、「月並調」に対する「明治の俳諧」（「真の俳諧」）を将来せんとするのである。例えば、無黄があげているいくつかの「新題」の中で「アイスクリーム」などは、まさしくそれに該当するであろう。『日本大百科全書』（小学館）を繙くと「明治二年六月に横浜の町田房造が馬車道通り常盤町五丁目で販売したのが最初で、その後明治二十一年に東京・銀座の風月堂米津、明治三十二年に東京・銀座の資生堂が発売するに及んで一般に普及し始めた」と記されている。無黄が右の文章を書いているのは、明治二十九年（一八九六）のことであるので、本人が自負していたであろうように「文明の新事物」に「すぐる敏感に反応していたこと」が窺われるのである。さて、実作は、となると、さすがは正岡子規、明治三十二年（一八九九）八月二十三日付の高浜清（虚子）宛の手紙の中に、

一ヒのアイスクリームや蘇る

持ち来るアイスクリームや簞

の二句を書き付け「アイスクリームは近日の好味早速貪り申候」と記しているのである（明治四十一年刊の今井柏浦編『新撰歳時記』が「ラムネ。サイダー。アイスクリーム」の項に子規の「一ヒ」の句を掲出している）。

もつとも「新題」を無闇に増やす傾向を疑問視する声も聞こえる。昭和七年（一九三二）十一月刊の『俳句講座 概論作法篇』（改造社）所収の松瀬青々稿「季題の範囲とその推移との考察」の中で、青々は左の「ごとく語っている」。

明治この方の季題に「海水浴」がある。「火事」を冬季にするといふ事は考へ物である。「端居」を夏季にする事は穩当で無い。「布団」を冬季にした事は動かすべからざるものあり、古人の感じ別つ事は流石である。（中略）新題に懐しい題（筆者注・大阪天満宮の「秋思祭」のごとき題）の殖える事は誠に喜ばしい。之に反して、たゞ新らしい題だといふ丈けで、季感が伴はず、潤ひの無いものならば、それは無理に題にしたもので有つて、顧る人も少からう。旧を捨て新に就くのが推移の常ではあるけれど、その間また、永遠性の如何ともすべからざるものがある。

つて、その物おのづから不易の価値を保有してゐるのである。

青々が言うように「季題」（季語）にも不易性の高いものと、流行性の高いものがある。「新題」の中にも、自から不易性を備えた「季題」も存在するわけである。時代の息吹きを感じさせるとともに「季感」が伴い、潤いのあるところの「季題」（季語）である。さしずめ青々が示すところの「海水浴」など、その好例である。明治三十七年（一九〇四）十二月刊の子規門の寒川鼠骨著『俳句新歳時記』（大学館）は、いちはやく「海水浴」を立頂し、左のごとく記している。

避暑 海水浴。ハンモック。都門の暑気を避けて山間海辺に行くを避暑と云ひ、海水に浴して遊ぶを海水浴と云ひ、夏季樹蔭に吊して其上に寝ころぶ網をハンモックと云ふ、何れも夏季の行事なり。

ちなみに、鼠骨は『新歳時記』の「緒言」において、俳句を作るに四季の景物を入れるのは、其の季の景物によつて其の時候の連想を起させるが為めで、若し此の季の物を入れない時は殆んど狂句と相択ぶ所なく、全く非文学的の文字に落ちてしまふのである、苟も俳句を文学として研究するには是非共此の季の景物を入れねばならないのだ。

と述べている。小稿冒頭に紹介した寺田寅彦の言葉と相呼応する見解である。ただし、先の「海水浴」の実際の例句となると、見出だすのがすこぶる困難である。多くの類題アンソロジーが「海水浴」を立頂しながらも、

「潮浴」（汐浴）の句を例示するに止まっているのである。明治四十四年（一九一一）十二月刊、今井柏浦編

「最近新一萬句」（博文館）中の、
海水浴皆上りたる海紅し 歩沾
など初期における貴重な用例であろう。

「季語の消長」

「季題」（季語）の中には、大部の歳時記からも消えていく運命にあるものもある。最新の歳時記として、私自身も項目執筆にかかわった飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修の『新日本大歳時記』（講談社）全五巻がある。そこにおいては、無黄が「新題」として主張した「招魂祭」は立頂されているが「耶蘇祭」は入っていない。大須賀乙字は「人事は季題たる能はず」との言葉

を残したが、やはり人事の「季題」（季語）において待
にその消長は顕著である。

私自身、『新日本大歳時記』にかかわってこんな体験
をした。当初、私の執筆担当分であった夏の「季語」で
ある「百物語」を総ページ数の関係で、ある時期、除外
しようとする動きがあった。私は文化的に意味のある
「季語」であるので、是非残してほしい旨主張した。幸
い代表編集委員の鷹羽狩行氏の御理解によって事無きを得
たのであったが、ひよっとしたら「百物語」が歳時記
から消えていたかもしれないのである。

（平成十三年「俳句」5月号）